

材木を担ぎながら 其の参 —プラモデル熱中世代—

きよ ほうへん
清 方扁

新木場でいつものように材木を担ぎながら、晴れた空を見上げると、きれいな高い空と真っ白な雲が続いていました。そしたらフッと子供の頃夢中になって作ったプラモデル作りを思い出しました。その頃の一番人気は旧日本軍の軍用機、当時の少年雑誌には様々な日本の軍用機の活躍が紹介され、子供心になんでこんなに優秀な飛行機があるのに日本は負けちゃったんだらうって本気で思ったものでした。零戦とか隼なんていうメジャーな機が好きなんて言ったら素人、これからお話する機種もご存じの諸兄も多いと思いますが、まずは偵察機「彩雲」(名前がかっこいいでしょう～!)三名乗りで速度が速く「我に追いつくグラマンなし」という有名な無線を司令部に打電しています。



高速を誇った「彩雲」

また「月光」や「銀河」は双発の夜間戦闘機で、夜間に空襲してくるB-29を忍者のように撃ち落としていくなんて記事に胸躍らせたものでした。

ここまで書いて来て殆どの読者は「あんた、何の話をしているの?」って呆れ返っていませんか。いいんです。私はただ子供の頃の追憶に浸っているだけなんですから。それにお付き合いいただければ幸いです。続けます。続いて「震電」。独特な形状と高性能で夢の戦闘機と期待されましたが、テスト飛行が始まった頃には終戦、もしこの震電が実戦に投入されていたらどんなに敵を震えあがらせただらうと、子供心に真面目にそう思っていました。



アニメにも出てきそうな「震電」

軍用機は戦争に使われる兵器ですが、スタイルやデザインだけで見ればスポーツカーを見ているのと同じような感覚です。昨今の人気高級車は欧州車が全盛ですが、当時のヨーロッパ戦線で活躍した戦闘機もスタイルだけで見れば今の乗用車と同じで日本機は欧州機には敵わないような気がします。

ドイツのメッサーシュミット、生産機数30,000機(日本の最大生産数を誇る零戦が10,000機ですからいかに生産力があつたかお分かりでしょう)このメッサーシュミットに搭乗してエースパイロットのハルトマンは敵機を352機(主にロシア機)、ハンスヨアヒムマルセイユは158機(欧米機)を撃墜し、ハンスの活躍は「撃墜王アフリカの星」(1957年製作)という映画になったほどです。現代のサッカー選手のようなヒーローだったんでしょう。私はBMWやベンツのエンブレムをみるとこのドイツ戦闘機のプロペラに見えてきます。ドイツの工業力とデザイン力には敬服させられます。



洗練された独の戦闘機「メッサーシュミット」

一方のライバル、英国の戦闘機スピットファイアは英国王室の優雅な貴族を彷彿とさせられますし、アメリカ戦闘機のP51ムスタングは名前のおりギラギラのアメ車といったところ、フランス機は『星の王子さま』の作者サンテグジュペリが乗っているようなロマンティックですが性能の悪いイメージが浮かんでしまいます。イタリア機、スウェーデン機にも性能はともかく魅力ある機種がありますが、ロシア機は何だか墜落しそうで、乗ってみたい方はおられないかと思えます。



優雅な英国の戦闘機「スピットファイア」

話があちこちに飛んでしまいました。まだまだ子供の頃の追憶は尽きませんが、今回はこの辺りで。最後までお読み頂いた方には心より感謝いたします。この次はまた性懲りもなく軍艦編も書かせていただければ幸甚です。